



食の環境

教育委 渡辺陽子

健康・体力づくり・スタミナ食・健康に関する雑誌や本が数多く出まわっている。小さな子供までが栄養という言葉を口にする。

「好き・きらい」何にでも誰にでもあることだが、大ま主観的で感情が伴うものである。感情はその人の育つ環境が多分に支配するといわれる。たべるものの嗜好も同様である。

生後四、五カ月には塩味・甘味がわかり、七、八カ月になると口あたり、匂い、味覚がわかり個人差が出てくるといわれる。味覚は一定してしまうものでなく、年齢、環境により変化するが、個人差は変化しにくい

ようである。しかし味覚の基の作られる頃に、片寄りのあるたべものしか与えられないと、これを改めるには大変な困難がある。濃い味は高血圧症に、高カロリーは心臓病、肥満、成人病につながる。偏食に気づいてあれもこれもと強制すると、感情の発達と共に偏食が強くなり、時にはアレルギー症にまで発展する。片寄った食生活、偏食は性格まで片寄るといわれる。「偏食が多いのでよろしくお願ひします」と簡単に教師に依頼する母親が多い。偏食は作られたもの、家庭の食生活や子育ての時に原因があることを考えたい。

「命は食にあり」という諺がある。たべものは人を作りときには病気を生ずる。日本の国ほど食事の種類・食品・調理法の多い国はないといわれる。おいしいものを沢山たべただけでは健康は保てない。数多い食品の中から、今自分の健康のために何が必要かを考えて、楽しい食事のとれる環境を作り、心身共に健康な子供たちを育てたいものである。

公務員批判に思うこと

衛生局 山田雅道

世の中には、先人観だけで嫌われる人種が存在する。われわれ公務員はまさにその筆頭であろう。先般、国や自治体の不正経理事件が次々と発覚し、「ヤミ××」「カラ〇〇」という言葉が流行語になるほど、連日のように新聞の紙面を賑わし、公務員の一挙手一投足に非難が集中したが、それら一連の事件は住民のそのような先入観を不動のものにしてしまったようだ。新聞で報道されたおかげで奥さんに内証にしていたのがバレてしまい、夫婦の仲が一時険悪になったという話なら、まだ笑い話で済ませられるが、区役所の税金関係の職場では、「ヤミ給与を払うために税金を納めているんじゃない」と相当きつい嫌味を言われたそうだ。

そのような住民の非難に対し、自治体労働者の一人として反論すべき点もあるが、同時に私は次のような思いを抱いた。

即ち、「公務員は全体の奉仕者である」という言葉をわれわれ公務員は聞き飽きるほど聞いているが、聞き飽きているということと、十分理解しているということとはイコールではなく、まして、その言葉の精神どおり行動しているか、となると全く疑問と言わざるを得ないのではないかという思いである。前述の住民の先入観は、実は、公務員自身の「全体の奉仕者」感の欠如ないし希薄さを土壌として成長したのではないだろうか。われわれは、この際改めて、「全体の奉仕者」という言葉のホコリを払い、自分たちの組織や行動がその観点から遠くかけ離れていないか点検すべきであろう。

そうすることによって、「役人天国」等の画一的イメージ〈へあとがき〉

一人暮らしをするようになってから、食生活などというものはなくなってしまう。朝食はモーニング・サー비스、昼食は変りばえのしないランチ、夕食はレトルト食品か定食という具合だ。家庭の味とは名ばかりの

ら脱け出すことが可能になるであろうし、また、公務員自身も自己の果すべき役割を正しく再認識でき、それが更に、「やる気」にもつながると思う。

「調査季報」は職員が自由に意見を発表し討論する行政研究誌です。「行政研究」への投稿も歓迎します。二〇〇字詰五〇枚以内でいつでも投稿できます。都市科学研究室まで（二〇二九）。この「読者のページ」へもご投稿ください。市政、都市問題、自治体問題等、題材は自由。七〇〇字以内。

訂正

前号（63号）に次のような誤りがありましたので、訂正しておわびします。▽60頁表1と64頁図14の内容を入れかえる。

定食屋で、一人ボンボン食することのなんと味気ないことか。サラリーマン家庭でも、生活時間の違いから家族がバラバラに食事をすることが多い。せめて朝食ぐらゐ家族全員揃って食事を楽しむという生活の転換が必要ではなからうか。〈多根〉